３－２　八千代市神野の新発見板碑群の調査概要

蕨 由美

はじめに

令和２年度当会の研究課題として「旧村神野の総合研究」を始めるに当たり、2020 年２月 22 日、村田一男顧問の解説でフィールドワーク「神野地区を歩く」が催され、多くの会員が参加した。その際に、旧家の土井昭雄家に立ち寄ったところ、同家敷地内に多量の武蔵型板碑が保管されていることが判明した。これらは、未報告の板碑群であったことから、当会で調査することになり、村田顧問をリーダーに８名（注１）の調査グループが編成され、同年６月 27 日、土井家のご厚意でこれらの板碑群の調査を行った。

今回調査された板碑の数は断片を入れて 121 点あり、これまでの八千代市内ですでに確認されている板碑総数 171 点（注２）に対し相当な数になることから板碑研究の重要性を鑑みて、調査の概要を速報として報告したい。

１．板碑の種類・形状と八千代市内での既報告の事例

「板碑」とは、板状の石材に仏像を表す種子（しゅじ）や被供養者名や年月日を刻んだ鎌倉時代から室町時代の仏教の供養塔である。生前供養の「逆修」もまれにあるが、故人追善のための墓碑が多い。

千葉県では「武蔵型板碑」と「下総型板碑」、「在地型板碑」の三種類があり（注２）、武蔵型板碑は、秩父産の緑泥片岩を使用し、頭部が三角で二条線を刻み、薄く長細い形をしていて、関東各地で多数見られる。

八千代市内でも 171 基のうち、６基が下総型、他 169 基は全て武蔵型板碑である。そのうち米本の「長福寺の板碑一括」（有刻 19 基・無刻５基・断片数枚）が文化財に指定されており、神野では、小名木淳家の康永三年銘ほか 13 基、土井與助家墓地の延文銘ほか 10 基、福田広家の２基の武蔵型板碑が報告されている（注２・３）。

下総型板碑は筑波石（黒雲母片岩）製で　古墳石材の再利用が推定されて、その多くは、香取市や成田市、印西市などに多く分布している。

神野でも玉蔵院境内に神野新山から移設された南北朝時代と推定される高さ 160・幅 130cm の大型で胎蔵界大日如来の種子「アーンク」と多数の戒名を刻んだ下総型板碑があり、八千代市の文化財に指定されている（注３）。

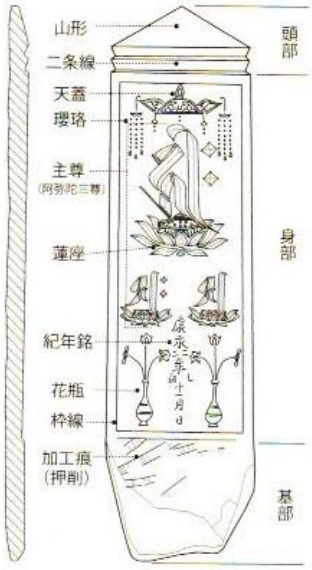


図　板碑の形態と名称

（上の図は注４から引用）

今回、調査した土井昭雄家所蔵の板碑 121 点は、全て武蔵型板碑であり、他に小型の五輪塔の空風輪部１点があった。

五輪塔の空風輪部

２．調査の方法

土井家の保管場所から納屋と庭先に運び込んだ板碑を洗って土を落とし、村田顧問の指導で、分類と計数を行い、さらに１点ずつ、計測と梵字・装飾・銘文をカードに記入、拓本採りと写真撮影を行った。

分類は、有刻完形板碑・有刻上部断碑・無刻上部断碑・無刻完形板碑・無刻下部断碑・無刻断片・他の石塔（五輪塔）とした。

①運び込んだ板碑の洗浄作業

②分類作業

③計測と梵字・装飾・銘文をカードに記入

④拓本の採取

３．調査結果の概要

調査した資料の分類と数は表１の通りで、板碑の総数は 121 点、うち無刻で上下不明の断片 35 点を除くと、基数は 86 基以内と推定された。

有刻の完形碑 12 基と、上部または下部の断碑で在銘と推定された板碑数点の拓本を

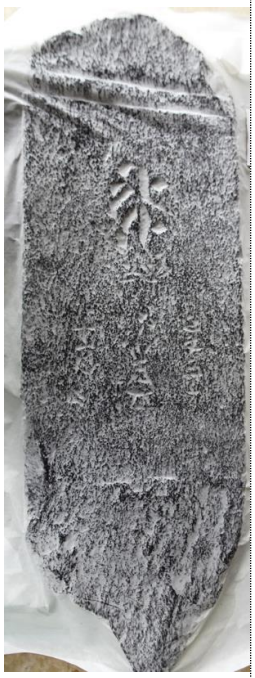
採り、表２の通り、種字や年銘を調べた。

その結果、年銘のあるのは９基で、種字はすべて阿弥陀如来を表す「キリーク」一尊、蓮座を伴い、中には花瓶の表現が残っているものもあったが、被供養者名の銘はなかった。

表１　　調査資料の分類別概要

分類	数	資料 No.	分類の定義
有刻 完形 板碑	12	No.1~12	ほぼ完形で梵字・蓮座・銘文のいずれかあり
有刻 上部 断碑	19	No.13~31	上部のみで梵字・蓮座・銘文のいずれかあり
無刻 上部 断碑	12	No.32~43	上部のみで銘文・図像の刻なし
無刻 完形 板碑	11	No.44~54	ほぼ完形で銘文・図像の刻なし
無刻 下部 断碑	32	No.55~86	下部のみで銘文・図像の刻なし
無刻 断片	35	No.87~121	上下不明の破片で銘文・図像の刻なし
五輪塔の空風輪部	1	No.201	

表２　　有刻板碑の拓本（No.14 のみ写真）と銘文



No. １　（1358）
銘「延文三年
十一月　日」
二条線・キリーク・
蓮座・花瓶

No. ２　（1357）
銘「延文二年
十月　日」
二条線・キリーク・
蓮座・花瓶

No. ３　（1360）
銘「延文五年
十一月日」
二条線･キリーク･蓮座

No. ４　（1461）
銘「長禄五年
月　日」
キリーク・蓮座

No. ５　（1466）
銘「寛正六年」
キリーク・蓮座

No. ６　（1477）
銘「文明九年」
キリーク・蓮座

No. ７
キリーク

No. ８　（1478）
銘「文明十年」
キリーク・蓮座
花瓶

No. ９（1467）
銘「文正二年」・蓮座

No. 13　（1467）
銘「文正二年」・蓮座

No. 14
二条線・キリーク

No. 15
キリーク・蓮座・花瓶

紀年銘は、延文二・三・五年（1357～60）、長禄五年（1461）と寛正六年（1466）が各１基、文正二年（1467）が２基、文明九・十年（1477・1478）が各１基の計９基であった。

その他、弧状線の略式蓮座を伴うキリーク一尊や、キリークのみが浅く彫られ、またその痕跡が見受けられる程度の粗雑なものが 22 基あり、また完形でありながら無刻で粗雑な小型の板碑が 11 基あった。

表３　有刻・無刻の板碑群写真

No.1～12　有刻 完形 板碑　（12 点）

No.13～31　有刻 上部 断碑　（19 点）

無刻で粗雑な完形小型の板碑

４．考察

今回の調査では、９基に年銘があった。うち No.１～３の３基については、元号は南北朝時代の北朝年号の「延文」であり、二条線・キリーク・蓮座・花瓶が彫られ、残存状態も良好な板碑であった。

また No.４「長禄五年」銘碑は、市内初出の「長禄」銘である。この板碑には、「月日」に数字が入れられてない上、長禄の元号は同４年 12 月に「寛正」に改元されていることから、先付で銘を刻んだ半製品として流通していた可能性がある（注５・６）。

さらに、No.５の「寛正六年」銘碑と No.６の「文明九年」銘碑は、「月日」すら省略され、二条線もない。No.９と No.13 の「文正二年」銘の断碑２基もおそらく年銘のみであろう。以上からは、時代が下るにつれて、簡略化粗雑化が進む様相がみてとれる。

また、今回の年銘のある９例では、1357～60 年が３基で、1461～78 年が６基という前後二つの時代に分かれた。千葉県内と八千代市内の調査例でも、武蔵型板碑の年銘が 14 世紀中葉に第１ピーク、15 世紀後葉に第２ピークがある（注２・４）というデータと照らし合わせると、同じ傾向であった。

八千代市内の武蔵型板碑 166 基中、年号があるのは 56 基である（注２）が、今回調査した板碑群では、年銘が確認できる板碑は９基と、断片 35 点を除く 86 基のうちの１割程度であり、その他の多くは、梵字のキリークのみか無刻である。

無刻で粗雑な完形小型の板碑 11 基について、このような無刻の板碑は、印西市の吉田天神前遺跡出土の板碑群でも多く見られ、本間岳人氏は「粗雑にみえるがあくまでも製品であり、板碑として造立されたもの」（注４）と推定されている。

これらの在銘例が少ないという構成は、印西市内の打手第二遺跡や吉田天神前遺跡など発掘調査の際の一括資料の板碑群（注４）と共通しており、在銘板碑と同時に無銘の

断碑や破片も一括した資料として把握できたことは、今回の調査の大きな成果であった。

おわりに

本会では長年、旧村単位の地域に密着した総合研究を重ねてきたが、その都度新しい発見があり、今回の調査も、神野のフィールドワークで、慶長７年の水帳に田畑を持つ幻の廃寺「道生寺」の痕跡を探して、旧家の土井昭雄家に立ち寄り、村田顧問が廃寺の手掛かりとなる石造物の有無などをお尋ねしたことが、今回の多量の板碑発見のきっかけであった。

村田顧問には、在銘資料だけではなく、無刻の断碑や破片も１点ずつ分類し記録する的確な方法で調査を采配され、一括資料としての価値も付加される結果をもたらされた。

それはまた、小さな破片も残らず土中から収集され保管されてきた土井家ご尽力のたまものであり、さらにご当主の土井昭雄氏には、調査に全面的にご協力いただいたことに、本会をあげて深く謝意を表する次第である。

なお、本稿は、この調査を指導された村田一男顧問が執筆する予定であったが、同顧問のご体調とご都合により、筆者が依頼されその概要を速報としてまとめたものであり、今後、本調査の記録票データによる詳細な報告を待望するものである。

最後に、筆者には難解を極めた銘文解読について、丁寧にご教示をいただいた板碑研究家の野口達郎先生に感謝申し上げます。

注

１．調査者は、村田一男・畠山隆・菅野貞男・青田博之・斎藤惇・松柴慎吾・山口忠・蕨由美の８名

２．「第五章第二節 市域の板碑」 『八千代市の歴史　通史編 上』八千代市　2008 年

３．「第２章 九 金石文」『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』八千代市 1991 年

４．本間岳人「印西の中世板碑をさぐる」『印西の歴史』第 12 号　印西市史編さん委員会 2020 年

５．千々和實「板碑工作と中世的供給源の一考察」『板碑源流考』吉川弘文館　1992 年

６．持田友宏『甲斐国の板碑１ 郡内地方の基礎調査』クオリ　1988 年に記された「都留市大平薬師堂の『嘉吉二年　月　日』の板碑」の項の解説に「本碑には、紀年銘の月日が入っておらず、・・これは商品として生産された板碑が、購入者によって後日供養者名と月日を入れることを示しているのであろうか」と記載されていることを、野口達郎氏からご教示いただいた。